



Title	<図書紹介>Jude Burkhauser ed., `Glasgow Girls' Women in Art and Design 1880-1920, Canongate Publishing Ltd., Edinburgh 1990 Cheryl Buckley, Potters and Paintresses Women Designers in the Pottery Industry 1870-1955, The Women's Press, London 1990
Author(s)	吉村, 典子
Citation	デザイン理論. 1993, 32, p. 112-115
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/53045">https://doi.org/10.18910/53045</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

Jude Burkhauser ed., 'Glasgow Girls' — Women in Art and Design 1880-1920 —, Canongate Publishing Ltd., Edinburgh 1990

Cheryl Buckley, Potters and Paintresses — Women Designers in the Pottery Industry 1870-1955 —, The Women's Press, London 1990

女性の活躍が目ざましい昨今、歴史研究においても、女性の活動をテーマとした書物が増加傾向にある。早くから婦人問題に取り組み、「フェミニズム先進国」とも言われているイギリスでは、装飾芸術史においても、既に多く書物が出版されている。こうした著書の中から、近年出版された2冊を、まとめてここで取り上げてみたい。

まず、「Glasgow Girls」であるが、これは19世紀から20世紀にかけての世紀転換期に、グラスゴウの街を中心に活躍したグラスゴウ派の動きの中で、ユニークかつ独創的な芸術活動を繰り広げていた女性に着目し、19人の研究者により、その全貌を示していったものである。特に本書は、当時の社会・文化構造を明確にしなが、その中での彼女らの活動が、社会的にも美的表現においても、革新的なものであった点を強調している。これは同時に、こうした女性たちの活動を、付加的にしか取り上げていない因襲的美術史・デザイン史をフェミニズム的スタンスからも批判し、再検討していこうとする意図も含んでいると言える。以下、簡単に内容を紹介することにした。

世紀転換期、ロンドンに次ぐ第2の都市と言われたグラスゴウは、造船を中心とした工業都市であり、また輸出入の拠点ともなり、国際都市としても栄えていた。第1

章(Second City of The Empire)では、こうしたグラスゴウの街の繁栄ぶりを背景に、女性と装飾芸術の密接な関係を示している。

また、街の繁栄もさることながら、あまり伝統に縛られない都会的で、新興的な雰囲気は女性の社会進出も助長させていき、世紀転換期の何か新しさを求めていく風潮が「新しい女性」をも生み出していった。第2章(The 'New Woman' in The Arts)では、そのような状況において、芸術の分野で台頭してきた女性たちについて述べている。ここでは社会面で婦人参政権を求めていく様子を背景に、芸術の領域で、ヌードデッサンができない等、女性たちにとっては不利であった当時の社会文化構造、組織に対抗していく動きが書かれている。

続く第3章(The Glasgow Style)では、グラスゴウ派について論じており、この派の特徴をはじめ、この派がどのように発展していったか、という点を中心としている。そして発展の中核としてグラスゴウ美術学校を取り上げ、1885年に、校長に就任したF. ニューベリーの、男女に平等の教育機会を与えていく動きが、学生、講師ともに美術学校での女性の数を増加させ、特に装飾芸術の分野での女性たちの活躍は、グラスゴウ派の発展に先導的役割を果たしたもの

として取り上げている。

第4章 (The Designers), 第5章 (The Painters) は、デザイナーや画家を一人一人取り上げ、彼女らの活動を紹介し、その業績の重要性を示している。最初に取り上げているマーガレット・マクドナルドは、マッキントッシュの妻としても知られているが、彼女や彼女の妹フランシスの表現した細く長く伸びた女性は、「スプーク (お化け・幽霊) 派」と名が付くほど初めは非難された。しかし他方で、その創造的表現は新しい図像表現として同時代あるいは後世に革新的展開をもたらすものであり、そうした点を本書では強調している。また、活動の方針に関しても、地位、名誉、財産等、世間一般に認められるような成功を求めると、それとも、リスクは伴っても、理想を追い求めていくか、という選択において、マーガレットは後者を重視する姿勢にあった。本書では、彼女のこうした考えが、夫マッキントッシュを、世間的に認められていた職業建築家からモダン・ムーブメントの先導的アーティストへと変えていったものとして、彼女の存在を浮かび上がらせている。その他、マクドナルド姉妹以外にも、挿絵画家・装飾家として活躍したジェシー・M・キングの独創的な図像表現、また、刺繍の分野で、あまり高度な技術を使わず、単純なデザインで、新しい刺繍芸術の美的表現を確立していったジェシー・ニューベリーやアン・マクベス、そして、伝統的に男性の分野とされていた金工において、技術・表現ともに認められ、そうした分野において、女性の活動の場を形成していった金工装飾家デ・コルシー等が取り上げられている。他30人以上のデザイナー

や画家たちが紹介されているが、本図書紹介では、ここまでにとどめておきたい。

このように本書は、グラスゴーの多彩な女性の芸術活動を幅広く取り上げ、約300枚の図版も交え、視覚的にも充実したものになっている。さらに、巻末参考文献の中には、雑誌『ステューディオ』等における、彼女たちの活動を紹介した記事の掲載号リストも含まれており、今後の詳細な調査研究に大いに役立つものと思われる。

次に、同じく世紀転換期を含む時代に、イギリス陶磁器産業の発展に、多大な貢献をしていった女性たちについて論じている“*Potters and Paintresses*”を紹介したい。これは、当時特有の文化、政治、経済状況の中で拡大していく女性の活動を描きながら、彼女たちの活動意義や装飾デザインの価値を明示している。そして、それがこれまで受けていた評価に対する批判とともに、それらを歴史的に位置づけていく上での問題を提起している。本書は、こうした点を交え、時代とともに変化、拡大していく女性の活動を5章に区分し、記述している。

第1章 (A Woman Potter's Lot) では、社会・経済制度等により割当て (Lot) られていた女性の当時の基本的な状況を示している。陶磁器産業において、女性は主要な労働力の一つを担っていったが、19世紀中頃において、家父長制的社会は、女性を男性の労働アシスタントとして、そして資本主義社会は、低賃金である女性を利用していった。また、陶磁器生産過程において、成形は男、装飾は女というあらかじめ定められた役割も存在していた。このように当時の時代状況や慣習により位置づけられていた女性たちであったが、1870年代頃から

の労働組合形成等により、徐々に人権を確立させ、活動を展開させていく。

第2章 (A Private Space in a Public Sphere) からは、展開していく女性の活動が論じられている。その展開は、まず伝統的に女性の仕事とされていた装飾部門から広がっていった。1830年代から各地で開校されはじめたデザイン学校は、進展する産業に対するデザイナー養成を目的とし、40年代には女子専門の学校もでき始めた。それと連携していたミントン、ドールトンに代表される製陶会社は、製品の美的要素を高めるため、デザイン学校で訓練された人材を受け入れ、女子も積極的に雇用し、装飾性の高い製品を作るアート・スタジオを設立した。特にドールトンは、当時女性たちが、最悪の労働環境で奴隷のように働く状況に反感を持っていたことから、比較的衛生状態の良い装飾部門に女性を受け入れ、デザイン活動に専念でき、また商業主義の悪影響からも隔離したプライベートなスペースを提供していった。こうした点が、本章のタイトル A Private Space in a Public Sphere の意味するところである。この時点での女性たちの活動は、「装飾は女性」というそれまでの固定化された役割の中でのものとも言える。しかし、そうした中でも、単なる一労働力ではなく、確とした意識のもと、ある意味では人間一個人としての尊重を得、装飾活動に携わっていた点を、著者は強調している。こうした彼女たちの陶磁器生産に対する意識の変化は、装飾部門以外にも、活動領域を広げていく。

第3章 (Alternative Roles for Women) では、女性の意識の変化とともに

に、19世紀末から陶磁器産業へも浸透していったアーツ・アンド・クラフツ運動の理論により、それまでの固定化された女性の役割から、ある程度選択性のある (alternative) 状況へと変化していった様子を述べている。モリスの「日用品の美的センス向上」に対する考え方は、陶磁器産業において、特に女性の活躍がめざましかった装飾部門の活動に拍車をかけていった。また、形と装飾の有機的關係や、デザイナーがあらゆる生産段階を考えていくというアーツ・アンド・クラフツ運動の理論は、装飾中心であった女性たちの活動を、形も含めた総合的デザインへと拡大させていった。

このように、女性たちは徐々に活動領域を広げていき、やがて陶磁器産業の様々なデザイン戦略にも関わっていくようになる。第4章 (What the Ladies Think!) では、彼女たちのデザイナーとしての活動が最もめざましい戦中期を中心に論じている。1910年20年代は、産業と芸術に関する論議がより活性化し、モダニズムをはじめとする様々なデザイン論が形成され、陶磁器産業も様々な反応を示していく。当時のマス・メディアは、日用食器を主に購入する女性のニーズに答えるべき、「世のご婦人たちが考えていること」がデザインの一つのポイントになってくることをあげている。この点を本章のタイトルとしているのであるが、著者は当時の女性デザイナーの功績が、こうした点と結び付けて評されている状況を問題の一つとしている。つまり、当時いく人かの女性デザイナーたちは、鮮烈なデザインで産業界を賑わせ、大衆の人気を得、メディア等でも賞されてはいるものの、それは鋭くて知的精神の結果としてで

はなく、(女性であるから女性の考えていることがわかる等) 女性という生物学的特質により評されている点である。そして表現特性に対しても、感覚的、繊細、器用等というような一種ステレオタイプ化された女性の特質からの形容に留まっている。また、モダニストが主流であった当時のイギリス批評界では、モダニズムに則したデザインは、高い評価を受け、スージー・クーパー等のように、同時代の男性デザイナーと同じレベルで語られることもあった。こうした状況に対し著者は、モダニズムの要素からでは評価しきれない多様かつ勢いある彼女たちの活動の存在を、様々な例をあげながら強調している。

続く第5章 (A Studio of One's Own) は、前世紀からのアーツ・アンド・クラフツ運動の思想や、バーナード・リーチらをはじめとするスタジオ・ポッター・ムーヴメントの触発により、形と装飾の総合的デザイン思考が、より強まっていく中で、女性たちの動きを取り上げている。当時のこうした一傾向に対し、いく人かの女性のデザイナーたちは会社に属し、産業の中にクラフト的要素を展開させていき、またいく人かは、企業から独立して、自分自身のスタジオを設立していった。まだまだ数にしては少なかったものの、こうした真の意味で、自立していった女性デザイナーの活動を最後に取り上げ、戦後の陶磁器産業の再生までを区切りとし、本章を終えている。

このように本書は、陶磁器産業における女性の活動や装飾デザイン的価値を、様々な視点から論じている。そしてそれらが、ステレオタイプ化された女性の芸術的特質からの形容に留まっている状況等を取り上

げ、そうした概念の中に留まるべきでない当時の女性たちの多様な活動を明かにし、陶磁器産業の歴史を形成していった、あるいは、生活空間に彩りを与えていった女性デザイナーたちの重要性というものを浮かび上がらせている。

本図書紹介では、女性というカテゴリーから考察した2冊を取り上げてみたが、まだまだ断片的で、発展途上にあると言えるかもしれない。しかし、固定化された概念や、定着した歴史の流れを覆していこうとする姿勢にあり、論じる上での新しい視点や、歴史の新しい側面を我々に提示しており興味深い。また、これらの著書は、女性たちの活動意義や功績をアピールするだけでなく、対象とした近代という時代の勢いも我々に伝えている。世紀転換期を含む近代は、様々な新興の勢力が台頭してくる時代であり、坩堝状態でもあった。しかし、その多様かつエネルギッシュな状態が、全体としては激しい力を発し、非常に興味深い時代を形成している。ここに取り上げられている女性たちも、それまでの社会規範から抑圧を受けながらも、近代の新しい勢力として現れてくるものである。彼女らの活動を歴史形成の一つの勢力と見なすこれらの著書は、複雑多様な世紀転換期の状況を解明させていくことにつながるものでもある。そういった意味でも、これらの著書は、今後の多くの発展材料を、我々に提示しているものと言えよう。

吉村典子 京都工芸繊維大学大学院研究生